

# Nieuwsbrief - augustus 2011

Galerie Iroha

‘ギャラリーいろは’は2011年9月で一周年を迎えます。8月のニュースレターは9月3日からスタートする一周年の特別企画展にお招きするアーティスト、金子安規氏の紹介です。金子氏は現在、オランダ、アムステルダムに暮らし、作品制作を続けられています。日本、海外で作品を発表し、アムステルダム、ロンドン、ニューヨーク、各都市での体験を経て、アムステルダムに渡り、Gerrit Rietveld Academieのガラス科で学ばれました。以来、オランダの地で様々な人達と関りながら、その体験を生かし、作品制作と発表を23年の間、続けられています。アムステルダムを制作の拠点に選んだのは訪れた他のどの都市よりも人間らしいテンポで動いていたから、と伺っています。

6月にアムステルダムにある金子氏のアトリエを訪問し、インタビューさせて頂きました。アムステルダムの中央駅からトラムで15分程の、素晴らしいローケーションにあるアトリエはとても広く、理想的。制作に使う様々な道具がきちんと整理されていて、金子氏の仕事振りが想われる空間になっています。

幸運なことに、制作途中の段階の焼き上がった作品を窯から出すところに立ち合わせて頂き、インタビューはスタート。何層にも重ねて焼かれた作品を取り出す作業は緊張間と期待の入れ混じった瞬間。作品はこの段階でまず選択されて、次の段階へ進み、ガラスを加えて再び窯に入れるというプロセスを伺いました。金子氏のお話はすごく奥深い上に楽しくて、笑いの絶えないインタビューとなりました。



写真1. 窯から生まれたての作品



写真2. 焼き上がった窯の中の作品



写真3. 窯から出して出来具合を見る

長友：「これは制作の第一段階なわけですが、すごく面白い形ですね(上記写真1、2、3参照)。シンプルで純粋さを感じる金子さんの作品にはどこかプリミティブな要素が含まれているように感じられるのですが・・・。」

金子氏：「そう、だってこれはもともと木にぶらさげるつもりで作ったものだから、葉っぱなわけ。だからその意識はあるわけだけれども、それ以前に僕は作品の仕上がり心で心を籠めているというより、制作の行為そのものに心を籠めていて、もちろん100%自分の行為を出すだけだけれども、その行為を出そうとする意識の中に既に自然との対話が含有されているから自分一人で作ってる感じではないね。その後は窯の中で土や釉薬やガラスが反応を起こすわけだから、その過程は自然に任せることになって、自ずと素材とのコラボレーションを通して自然と対話しているようなものだね。」

長友：「金子さんは多摩美術大学でインテリアを学び既に陶芸も学ばれた後、東京で数々の展覧会を開いて、斬新な作品を発表されていたわけですが、オランダへ来られるまでの制作について簡単にお話頂けますか？」

金子氏：「日本で確かに僕は既に陶芸を学んでいたし、ガラスを使った作品も、例えばガラスを溶かしたり、ラスターを塗ったりして実験しながら制作していたね。その制作の過程で自分の行為が消されるという体験もして、それがすごく面白かった。それでコントロールする部分とコントロールできない部分を作品に組み込むようになった。他にも色んな素材を使ってみたよ、木彫、木工なんかもやったし、木工は技の世界なんだよね、木組みなんかはコンマ何ミリを調節して木槌で叩いてすっと入るっていうような。それはそれで面白いんだけど、オレは技じゃなくて、トントン叩かない(笑、窯の中に入れてお願いしちゃって、出てきたものは従順に受け止める。起こったことは後から考えていけばよくて、次にはそれを意図的につかっていきける、その繰り返しなんだよね。」

長友：「金子さんは素材そのものを見せるという面も大切にされていて、色々な素材を溶かしたり、焼いたりする方法で作品を作っていく過程で自然と対話しているっていうことなのですね。作品そのもののテーマとかインスピレーションのもとなどは自然の形象にもあるということですか？」

金子氏：「そうだね、日本にいとこのへんは暗黙の了解みたいなものがあるから、そこをつっこまれることはないけど、ヨーロッパに来ると、なんでそうなっちゃう君なの?って、つっこんでくるわけ。ナニモノなんだ?っていうところまでね、そうするとプライベートなところまで説明しなきゃなんないんだよね、子供時代はこうで・・・って。でも、それも自分で説明してて、正確じゃないよな、って思い始めて。」

Uitgave No. 3  
Augustus 2011

Colofon

Mamiko Nagatomo  
Hans Langen



# Nieuwsbrief - augustus 2011

オランダに来てからすごく自問自答が始まったよね。オレを支えてくれてた風土はなんだっただろう?って。日本の文化は一体何だったんだろう?って。その辺をわりと冷静に分析してから、こういうところが好きだからかな?ってヒントを色々ピックアップしていったわけなんですよ。そうすると日本人の特性が見えてくるような気がして、その特性が見えてきたところで、ふっと、これはオランダ人は持ってないんだよね、この特性ってここにいう武器かもしれないなって思うようになったんだよね。」

長友：「それは、オランダに暮らして制作していく中で、金子さんの日本人としての意識がより明確になってきて、それが作品にも繋がっているということでしょうか?」

金子氏：「そうです。例えば、日本にいる時は四角い矩形でも何ら気にせず、ここに起こる現象だけが見える、と思ってたわけ。でも、オランダ人に見せると何で四角いんだ?と、お前が自由だといって主張するんだったら、これは四角じゃなくてもいいんじゃないか?って言うわけ。いや、それは四角だっというじゃない、形の問題じゃなくて、心の問題だっという、おまえはディテールにばかり走ってる。この矩形っていうのは一体何なんだ?ってということも考えてないって言われて、それで考え始めたわけ。そうか、じゃあ思いっきり形ぶっこわしちゃえっと思って、出てきたのがこれなわけ。形を作らないで形を作る方法は何があるってということなわけだね。」

長友：「それで、例えば今、窯から出てきた作品の様な形が生まれたわけなんです。確かに葉っぱに見えないことはないけれど、葉っぱとして形作られているわけではないですね。意図して出てきた形と土が勝手にこうなってしまうというような形が、共存してる様に感じられます。金子さんにとって、これはオランダに来て制作する中で得た大きな刺激、大きな変化だったわけですね。」

金子氏：「そうですね。ここに至るまでの過程は確かに大きな刺激、変化だったね。その時にもうひとつ感じたことは、アムステルダムって小さな街だけど、当時でも120カ国から来た連中がうじゃうじゃしていたわけだね、ニューヨークみたいに、金持ちになろうっていうような、アメリカンドリームみたいなものはないんだけど、オランダ社会が持つフレキシビリティっていうか、そこの中に外国人が居て、余計なことをするわけ。その余計なことを、余計なことと思わずに見ようとするオランダ人がいるわけ。そういうことから、じゃあみんな何やってるのかっていうと、どのくらい余計なことなのかっていうことを100%説明するんじゃないだよ、

よく見てると皆“120%くらいオーバーにやってやっ通じる”っていうことを知ってるわけ、ここに住んでる外国人は。オレ、そこでそれを勉強したわけよ。だから、Gerrit Rietveld Academieを卒業する時点で、おまえはここで何を習ったか?って聞かれた時、『表現、120%必要です』って答えたことあって(笑。それはすごく勉強になったよ。それで、いまだに表現はオーバーにしています。]

長友：「笑)なるほど。鋭い!私はまだオランダ在住9年目ですけど、それ、すごく良く分かります。『表現、120%必要です』って名言ですね。これ、アートの世界だけではなくオランダのどんな社会においても言えるわけですから、意味が深い。でも、作品に関してオーバーに表現するって、すごく難しいですよ。例えばどこまでオーバーにするか、どこで止めるか、みたいなところが。」

金子氏：「そう、オーバーにすると繊細さが欠けちゃって、オーバーにした分ヒョウキンになったり、キツクになったりしやすいのよ。そこら辺はどうにも口で言えないね。できたものを見たり、やってみて、ここ、許せる、許せないっていうような、自分の感性の中でのこれはオーケーだけどこれは下品とかやりすぎ、みたいな(笑、そこはもう仕方ないね、見た瞬間に感じる場所で押さえるしか手がないんだけど。だから数一杯作る。どうしてもそこに自然のファクターが介在してるから、最後の選択肢としてインテンションを掛ける場所として。」

長友：「話がまたもとに戻ってしまいますが、金子さんがオランダに来られた目的はどんなものだったのですか?」

金子氏：「最初から、陶器とガラスをくっつけて作品を作りたいかったわけ。日本の美術大学では僕の希望は叶わなかった。それでイギリスやフランス、イタリア、スウェーデンの美術大学のガラス科を当たりました。ここでも僕のやりたいことをやらせてくれるところは無かった。それで友達のオランダ人からオランダの唯一ガラス科のある美術大学、Gerrit Rietveld Academieの存在を聞いて、やって来たわけです。」



金子氏(アトリエにて撮影)

# Nieuwsbrief - augustus 2011

Galerie Iroha

長友：「ようやく探し求めた希望の葉うガラス科がオランダに見つかったわけですね。そこで出会ったもの、見つかったものはどんなものですか？」

金子氏：「そう。もう少し話しを続けると、陶芸において、色の選択というのはすごく限られているわけ。どうしても陶芸の色になってしまう。そこを何とか違うものを探したかった。ガラスの色はとて鮮やかで透明感があるでしょう、これだな、と思った。ガラスの色が自分の色になったということかな。」

長友：「確かに、金子さんの作品を見せて頂いて、陶の上ののっているガラスの色にハッとしますね。彩度の高い色でも透明感によって見え方がすごく違ったものになっているし、新鮮な印象を受けます。陶で作られた支持体の方も違った見え方になって、相互作用が大きいことが分かりますね。」「ガラスの色の出方や形は最初からかなり計算するのですか？」

金子氏：「これは自分の意図するところと窯の中での素材の反応によって、言わばそこは勝手に色や形の出方が決まってくるから、自分でつくるどころと任せるところの駆け引き、計算できるところとできないところを全部含めて自分の作品になるわけで、そこどころが面白い。前にも話したけど、だから僕は沢山つくる。予測ができない分を最終的に選択肢を増やすことで補っているわけだね。自分だけでつくっている、って気がしないのはそれだからかな。」

長友：「今回の個展のタイトルは“nature-future-REstructure”、キーワードは「かくれんぼ」と伺ったわけですが、ここにはどんな想いが？」

金子氏：「アーティストは社会に向けて長いスタンスで意見が言えるということ。そして、日本人は例えば土とか木をモノなんだけれども、そこに魂を入れて擬人化するでしょう。神様が万物に宿っていると感じている。日本人はモノと人間の関係をオランダ人とは違う視野で見ている、その視野の違いを感じてもらいたいんだよね。自然と人間と物とのバランスを新たに問いかけたいという想いがあります。キーワードの「かくれんぼ」は隠されているもの：アイデアの思想的な原点を探してもらいたいから。」

長友：「日本人、オランダ人、様々な人達の目と心にどんな風に伝わるのか、とても楽しみです。かくれんぼがキーワードの展示は今から興味津々です。」「お忙しい中、お付き合い頂いてありがとうございました。」



2011 (37x55cmx5cm/ porcelain+color glass), 金子安規

ギャラリーいろは・1周年記念企画：金子安規 個展  
“nature-future-REstructure”

2011年9月3日(土)～10月30日(日)

オープニングパーティー： 9月3日(土)/12:00～17:00 金子安規氏、在ギャラリー

ギャラリーいろはの展覧会案内状をご希望の方は、タイトルを“案内状希望”として送付希望住所、氏名を明記の上 info@galerie-iroha.nlまでお知らせください。

皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ギャラリーいろは